法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-02

# Brown, Shipley & CO., Heir of Adventure : The Story of Brown, Shipley & CO., Merchant Bankers

NISHIMURA, Shizuya / 西村, 閑也

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
30
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
270
(終了ページ / End Page)
276
(発行年 / Year)
1962-04-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008297

# Brown, Shipley & Co., Heir of Adventure—— The Story of Brown, Shipley & Co., Merchant Bankers

西村閑也

マーチャント・バンカーは、預金銀行とともに、英国の金融市場の中軸をなすものであった。ところが彼らの経営の実態はあつい秘密のとばりにつつまれており、それだけにロスチャイルド、ハムブロ、モルガン＝グレンフェルなどの名は一種の神秘性を帯びることとなったのである。これは彼らの重要業務の一つである外国債発行が、高度の政治性を帯び、他の重要業務である引受業務では顧客たる商社の内情を外部にもらしえないためであろう。このため個々のマーチャント・バンカーについての社史はきわめて少なく、単行本としては、私の知っているかぎりでは、わずかにコルティのロスチャイルドの社史、(註1)ハムブロ銀行の自から出版した行史、(註2)アントニー・ジブズ・アンド・サンズの社史、(註3)および、ここに紹介するブラウン・シプレー・アンド・カムパニーの Heir of Adventure——The Story of Brown, Shipley & Co., Merchant Bankers があるだけである。

上記の諸書のうちハムブロ銀行の行史は一種の広告にすぎず、資料的価値は全くないといってよい。コルティのロスチャイルド社史は一八三〇年までしか扱かっていない。したがってマーチャント・バンカーがもっともはなやかな活動を示した十九世紀後半から第一次大戦前夜にかけての時期におけるマーチャント・バンカーの実態

をうかがうには、アントニー・ジブズのものと、ブラウン・シブレーのものしかないわけである。

(1) Corti, Egon Caesar: Der Aufstieg des Hauses Rothschild, 1770—1830

(2) Hambros Bank: Hambros Bank Ltd., 1839—1939

(3) Antony Gibbs & Sons Ltd., Merchants and Bankers: a brief record, 1808—1958 (1958)

ブラウン・シプレー・アンド・カムパニーは、マーチャント・バンカーとしては比較的歴史の新らしいものである。当社がロンドンに店舗をもうけたのは、ようやく一八六三年のことにすぎず、それ以後業務の中心が次第に商業から金融業務にうつっていったのである。マーチャント・バンカーとしては、このように比較的新参のものであるが、当社の商社としての歴史は、一八六三年をはるかにさかのぼっている。当社は、ナポレオン戦争前にリヴァプールの商人アレクサンダー・ブラウンがボルティモアに移住した時からはじまっている。最初は英国向雑貨の、後には棉花の輸出を取扱って急速に成功し、まもなくフィラデルフィア、ニュー・ヨーク、リヴァプールに一族を常住させて、形式的には各々独立したブラウン・アンド・カムパニーを上記各地に作った。そして一族中の主要人物が、上記各地のブラウン・アンド・カムパニーのパートナーを兼任して、各社間の連絡調整にあたっていた。

商社としての当社がいかに目ざましい成功を収めたかは次の事実によって明らかであろう。一八三七年のパニック時にはすでに、リヴァプールのブラウン・アンド・カムパニーは英国の主要商社の一つとなっており、イングランド銀行はパニック鎮静策として同社に一九五万ポンドもの貸付の約束をした。一商社に対する二百万ポンドもの貸付約束は当時に他に例をみないものであって、これをみてもリヴァプールのブラウン・アンド・カムパニーの地位のたかさが分るであろう。

ところで興味あることは、この一九五万の貸付約束のうち一一〇万ポンドは、同初の手形引受債務をカヴァーするためのものであった、という事実である。このことは当時すでに同社は貿易金融業務を大規模にいとなんでおり、いわば半商社＝半金融業者となっていたことを示している。名声のある商社が他社の手形の引受、送金のための為替手形の発行、振替預金の受入等の業務をはじ

め、漸次、純粋な金融機関に移行する、というのは、貨幣の発生以後の歴史の各段階のどれにもみられる一般法則であると思われるが、同じ法則がブラウン・シプレー・アンド・カムパニーについてもあてはまっているわけである。ブラウン商会は、当時次のような形で金融業務を行っていた。「ブラウン商会は、ニコルソン（ニューオリーンズ所在の代理店――引用者）その他の代理店を通じて棉花買付資金を前貸しして利子を取立て、信用状付で発行された手形を、船積書類とともに買取り、これら手形を、その時々に応じて、米国の諸ブラウン商会宛手形を支払うための送金為替として利用したり、英国のブラウン商会あて手形を支払うための送金為替として利用したりした。当時ニュー・オリーンズから船積され棉花の七五％以上が、ブラウン方式にしたがってリヴァプール及び欧州の諸市場に積出されていた。」（本書五三頁）。

## 三

前節にのべたような半商社＝半金融業者としての当社の業態は一九世紀の六〇年代に根本的な変革をこうむることになる。この変革をひきおこしたものは電信線網の建設、ことに一八六六年における大西洋海底電線のふ設に外ならない。海底電線のふ設は当時の商業の構造に革命的な変化を引きおこしたからである。というのは、電信線のふ設以前には、商品の需要と供給の出合いをとることがきわめてむつかしく、したがって生産者と消費者の間に何段階もの商社が介在し、しかも各段階の各商社が多量の商品の在庫を長期間かかえていて、購入の申込あり次第に手持商品を放出する、逆に商品の仕入れは供給者から、一時に、且大量に仕入れるという方式をとらざるをえなかったからである。このような事情は、イギリス国内だけについていうなら、一八三八―一八五二年の間に延長約四〇〇〇マイルの電信線がふ設されたこととほぼ同じ期間に国内鉄道網が一応の完成をみたことのため、相当の変化をみせた。だが国際貿易については、一八六六年の大西洋横断海底電線のふ設まで、商品の供給と需要の出合いをとることは極度にむつかしく、したがって委託又は自己計算で大量の商品在庫を手持ちする商社の存在は欠くべからざるものであった。そしてこの種の商社の多くあつまったロンドンは、いわば世界の商社として大模規な仲継貿易 entrepôt trade を行っていたのである。

一八六六年九月七日完成した大西洋横断海底電線は、一方では長距離海底電線網の建設の必然性を示すとともに、他方では、上記のような商業の構造そのものの根底をゆすぶるものであった。長距離海底電線は、商品の需給の出合いをとることを極度に容易にする。極端なばあいには、原料商品の生産者と、その消費者であるメーカーとが直接取引をし、仲介商社と中間商業利潤を一切排除することすら可能となる。このようなことが不可能なばあいでも、委託又は自己計算で大量の在庫をかかえ、供給と需要の間に一種のクッションをもうけるという商社の機能は不要となる。要求されるのは供給と需要をつなぐという才取りの機能だけである。これゆえに、一八七〇年代以後商社の地位はますます低下し、一方では直接取引、中間商業の排除、他方ではブローカーによる商社の代置という傾向がいちじるしくなるのである。以上すべてのことの結果として、全世界にわたって資本の回転時間は大巾に短縮されたのである。そして再生産過程の順調な進行を保障するために社会的に必要な在庫の量が減少するかぎり、この在庫商品の保管、維持に必要な諸費用は減少し、その限り価格水準の下落をもたらしたわけである。さらに又、需要者はいつでも、即座に供給者をみつけることができるため、原料商品を一度に多量に仕入れておいて、生産過程の円滑な進行を保障しなければならないという必要から解放され、必要の生ずるごとに当用買の方式で原料を仕入れるようになった。したがって一回の取引額は少額化する傾向をみせ、それゆえに手形による支払いは、現金支払（小切手支払）によってとって代られる傾向が生ずることとなったのである。(註)

このような条件の変化のため、イギリスのブラウン・シプレー・アンド・カムパニーは商業活動を停止し、金融業務に専ら従事することとなった。この点について、本書は次のようにのべている。「この港（リヴァプール）の一般的な貿易活動が、この革命的変革（海底電線のふ設に伴う）に自らを適合させおわるまでは、商人社会は手いたい打撃をうけた。というのは棉花その他の商品の委託販売――consignments――がほとんど消滅したばかりでなく、以前はリヴァプール商人の手を経由して輸出されていた輸出用工業製品が、製造業者によって直接購入者に、船積手形つきで送り出されるようになったため、この種の輸出業務も大巾に失なわれたからである。

かつてはリヴァプールのほこりであった古い商社が、まもなく消えうせた。これら商社は、性格を全くかえて上記のような変革に対応するか、又は（非常にしば〱生じたことであるが）閉店する外なかった。」（本書九五頁）

ブラウン・シプレー・アンド・カムパニーは性格をかえ、半商社＝半金融業者から、純粋な金融業者への転身をえらぶこととなった。そして純粋な金融業者になる途は、本処のリヴァプールからロンドンへの移転を必然的なものとした。ブラウン・シプレーのロンドンへの進出は一八六三年に行なわれ、一八八八年にはリヴァプールの店舗がついに閉鎖されてしまった。

ちなみに、海底電線のふ設取引方法の変化という事情の結果として商社からマーチャント・バンカーに転身したものはブラウン・シプレーにかぎられない。アントニー・ジブズ・アント・サンズ Antony Gibbs & Sons, Ltd. もまったくおなじ理由から金融業務に専ら従事するようになった。アントニー・ジブズはペルー・グワノ、チリ硝石等をあつかっていた商社であったが「汽船と電信と及びこの両者の結果としての競争は、次第に手数料をとる商人commission merchants の廃止をもたらした。以前は銅、樹皮、錫、銀、羊毛、グワノ及び時として取って扱いた化学工業用のチリ硝石からえられた巨額の手数料は徐々に少なくなってゆき、上記のような原料生産物の取扱は、年々ブローカーの手に移り、又は消費者へ直接販売されるようになった。」（Antony Gibbs & Sons, Ltd., Merchants and Bankers p.31）「上記のような商業取引様式の変化のため、南アメリカとオーストラリアとの取引だけではロンドン店（ジブズ商会の――引用者）のスタッフに仕事を与えることができなくなった。この事態に対処するため、金融の分野での活動の拡張がはかられた。」（上掲書三十二頁）

（註）　電信線網の建設が商業および一般に商品の取引方法に与えた影響については、スタティスト、エコノミスト、バンカーズ・マガジーンのような雑誌の中に数多くの言及があり、また一九世紀後半の各種の王立調査委員会 Royal Commission の報告及び証言録の中でも力説強調されている。ここでは大不況委員会 Royal Commission on Depression of Trade and Industry. 1886 の証言の中から、代表的な発言を一、二しめしておくことにしよう。「……電信の利用の発展からして、過剰供給

をよりいちじるしくさせる傾向が発生した。（商品の—引用者）各種の流通系路 channels of distribution において、小売業者から卸売業者等にいたるまで、以前より小ない在庫が必要とされている。大製造業者も、以前ほどは、手許に在庫をかかえている必要がない。電信のため、商人又は卸売業者は外国市場をもっとひんぱんに利用できるようになり、又汽船のスピードと数がましたため、十年以前とくらべると、信じられないほどの短い時間内に、注文を執行させることができる。在庫が手許にとどまっている時間がみじかくなったので、事業の不安定性がへった。そして商人は、以前より少ない資本で事業をつづけることができ、その結果として中間商人 middlemen を排除し、流通コストをさらに引き下げることができる。」(a statement pnt in by Luke Hansard of 68. Lombard St., London: Appendix C. XII, Third Report of the Royal Commission on Depression ofTrade and Industry)「鉄道と電信の発展のおかげで商人は現在では、以前にくらべてごく少しの在庫しかもっていない。全く在庫をもたない商人も多く存在する。かれらは現地の（インドの—引用者）商人の勘定で仕事をしており、注文されただけの量を船積する。これが現在の不況の一つの原因である、と私は思う。すなわち電信と汽船のおかげで在庫が処分されたことがである。またスエズ運河の開通は、その当座は、……生産の増大と同じ効果をもっていた、と私は言いたい。というのは中間在庫が消費者に一度におしつけられたからである……」(Evidence No. 5278. Royal Commission on Depression)

## 四

ロンドン進出以後のブラウンの発展については、この社史はあまり詳細に取扱っていない。おそらくはマーチャント・バンカーの業務につきものの秘密保持の必要性からして、年代の比較的新らしい時期の業務内容は公表しないことにしたのであろう。ロンドン進出以後の業務については、ただつぎの簡単な叙述があるのみである。

「ファウンダース・コート Founders Court（シティの地名でブラウン・シプレーの本店所在地—引用者）での業務は、この比較的無事平穏な時代にはブラウン兄弟商会（在米——引用者）のアメリカ人顧客へ引受信用を授与することに大体かぎられていた。したがってこの業務の真に重要な部分、すなわち信用供与要請の検討と信用度の測定とはニューヨークで行なわれた。更にブラウン兄弟商会

は長期債の発行をスポンサーしていた。そこでこの分野でもブラウン・シプレーは代理店（ブラウン兄弟商会の――引用者）として機能した。とはいえ、ファウンダース・コートでももちろんかなりの規模の外国為替業務があり、又ある程度は預金銀行業も行なわれていた。」（一二二頁）

そして純粋なマーチャント・バンカーへの転身は、当然にも金融業務の営業方針の変更を必然的とした。金融業務が商業の副業としていとなまれていた時代には、ブラウン・シプレーは次の二つの原則を、金融業務に関して有していた。すなわち同一企業に多額の信用を与えないこと（危険の分散のため）企業の大小や資力よりも、むしろ経営者の人柄を融資決定のさいの基準とすること、がこれである。しかし「商工業が発展するにつれて、時としては、個々の取引の規模があまりにも大きくなり、一社のマーチャント・バンカーではその取引全部を引受切れなくなった。同時に、運転及び通信の迅速化――国際的電信線網の建設にもよる――のため、商品の引渡しがより速やかになり、顧客の真の必要にこたえるため、より弾力性のある態度がとられるようになった。」（一〇六頁）

さらにブラウン・シプレーは、主としてアメリカからの旅行者に便宜を与えるため、ロンドンのウェスト・エンドに旅行信用状関係の事務を扱かう支店をもうけた。

## 五

以上でブラウン・シプレー・アンド・カムパニーの社史「冒険の子孫 Heir of Adventure」の紹介を終るが、本書の中でもっとも興味ある部分は、何といっても十九世紀中葉の商業取引方法の変化を扱った部分である。鉄道網、電信線網の建設と、汽船による帆船の代置、スエズ運河の建設といった一連の出来事の与えた深く広い影響については、従来よく理解されていなかったようであるが、この問題は一九世紀後半の新聞、雑誌、議会の諸委員会の報告及び証言録、諸王立委員会の報告及び証言録にはくりかえし言及されている。交通、通信のこの革命的変革の直接の結果は、資本の流通時間の大巾短縮であり、流通時間の短縮は一方では物価の下落の一動因となり、他方では、かの七〇年代以後の大不況期の資金過剰 plethora of money の原因でもある。その限り、運輸、通信の発展が及ぼした革命的な影響の理解なしには、十九世紀後半の経済史は論じられえないであろう。